



連載 | これからのランドスケープの仕事

ランドスケープは希望

Landscape is Hope

保 清人

Kiyohito TAMOTSU

株式会社ロスフィー
LOSFEE CO.,LTD.

10

緑に興味がない人

幸せな国デンマークでランドスケープ修行のスタートを切ったが、クラスにいたのはアーティスト、建築家、都市計画課、生物学者、社会学者、経済学者、メディア関連の人たちが多く、いわゆる“ランドスケープ”を専門にしている人はごく少数だった。日本に帰っても私が仕事している人たちといえば、製造業の工場長から医療関係者、行政まで様々である。行政でも公園課や建築課ではなく、産業振興、福祉、子育て支援関連の部署が多い。アカデミックでも私の師は気象学、経済、医療、社会、心理、ツーリズム関連。ランドスケープアーキテクトの職能を活かすというのは、“緑に興味がない人”と関わりながら、緑の効用や価値を伝え、仕事をつくっていくことだろう。多分野を横断しながら、つなげる役割を担う私たちは、異分野に新たな希望をもたらすかもしれない。

日本での最初のプロジェクト

鹿児島県の百貨店の屋上庭園を設計施工した際は、日本を代

表する建築家集団、デザインディレクター、コミュニティデザイナーなど、多様な職能が集うプロジェクトだった。クライアントの私への要望は、南国の暑さ対策に対し、私が気象学の先生と開発した最先端のひよけ製品“フラクタルひよけ”の設置であり、緑は特に求められなかった。元来フラクタルひよけは、巨木が育たず、植えるのも困難な都市環境で、どれだけ人に快適で涼しい空間を提供できるかが開発のコンセプトにある。私はひよけの設計だけでなく、涼しい環境で行われるアクティビティーと、影を好む植物たちがベンチを取り囲むデザインの他、人の滞留や行動による経済的価値も提案し、業務を得ることができた。屋上庭園のオープン後も空間の価値の証明のため、人の滞留時間計測や行動観察を行いながら、顧客の趣向にあったビジネスモデルをつくった。今では庭園が使い倒され、収益を生む屋上庭園として活躍している。緑や環境製品がランドスケープに溶け込み、施設の価値を高め、持続的な施設経営に寄与できることと、その価値を証明していくのは私たちの大切な職務だろう。



マルヤガーデンズソラニワ

医療、健康とランドスケープについて

私はスウェーデン農業科学大学では、緑がいかに心と体によいかを学んだ。リハビリのための園芸療法やヒーリングガーデンがイメージしやすい。環境心理学者のアルリッチやカプランがいう、オープンスペースの構成要素と人との関係、配置などは、今も私のデザインの基礎となっている。私がランドスケープデザイナーとして働いたオーストラリアでは、都市開発だけでなく、医療施設、老人ホームなどのデザインも多く、緑が人に良いのは当たり前で予算をかけるのも当然であった。しかし、鹿児島で精神医療を行う病院では、低予算で1 ha級の緑化をすることが課題にあった。クライアントも緑の重要性は最も理解があったが、建築費が高騰した状況もあり、それどころではなかった。材料は現地のリサイクル品を使い、施工法も一から考え直すことが求められた。しかしながら、私を悩ませたのは予算以外にも、建築とインテリアの配置。特に屋外に面した待合室は全面ガラス張りでの患者のプライバシーが保たれず、暑さ対策も必要であった。待合椅

子の配置も風景に背中を向けており、せっかくの風景づくりも患者さんを癒すことにつながらない。高さ4 mの全面ガラス窓では、予算もないため高木で影を落とすようなことはできない。そこで、フラクタルひよけを窓面に取り付け、暑さ解決を図った。そして、ダブルスキン植栽と称し、低木を立体的に配置することで外からの視線をほどよく遮蔽し、待合スペースから緑の風景を見せながら、建築の外と内からの視線が合わないよう工夫した。それを行うと、待合席の椅子の向きが180°変わった。これまで受付に向いた椅子の配置を、風景が見えるよう外に向きを変えてくれたのである。窓から見える風景が人を癒すという効能を知ってのことだ。私の海外のプロジェクトの一つに中国の太極拳ガーデンがある。工場の所員200人が毎朝一斉に仕事の前に太極拳を行うためのもの。健康経営としてランドスケープを活用する中国は、緑の価値を熟知し、日常生活にもすでに取り込んでいる。今後も世界中で、緑と健康の幸せな関係が認められていくのだろう。



空き家リノベ「となりわ」

空き家と空き地リノベーションと個人邸

私のライフワークとして空き地の自由広場転用がある。スポンジ化する中心街に賑わいをもたらせる行為として立ち上げたNPOのプロジェクトだ。オープンカフェのような用意された空間ではなく、居心地のいい広場がまちを豊かにするという理念を持っている。その活動を機に、八王子市の中心街で30年放置されていた空家のリノベーションのオファーがあった。だれが何をするためのリノベかではなく、ただ何とかしなければ、という行政オファーだ。空き家リノベはDIYであってもコストがかかる。プログラムが決まらないままただリノベするのは赤字の温床だ。そこで、私は空家の敷地にある100㎡の庭を皆に提供できる広場にしようと提案。そこで活動しながら、利用者が求める空間を描き、仲間を募り、空き家を再生すれば吉と思ったのである。単なるコミュニティスペースはターゲットがぼやけてしまい、イベントしない限り人が集まらない。そこで、中心街の日常で行き場のない子育て世代の空地WANTSが多いことを発見した。緑に囲まれ

ながら、子供を庭で遊ばせながらお弁当を食べるイベントが成功した。その後理解のある飲食店経営者も見つかり、空き家リノベ後も庭を開放してくれている。広場がお店の儲けにつながるか？という議論はあるが、それを活かせる人も多い。緑が“のぼり旗効果”として人を呼び、広場がクチコミ宣伝効果をもつメディアとして機能し、お店の持続経営に貢献できるのだ。昨今は杉並区、港区、渋谷区などの都心部や、緑多い相模原市の藤野や淵野駅辺付近の新興住宅地の庭のデザイン、カフェ、オフィスへの屋上、壁面緑化なども手掛けることが多い。住宅緑化はプライベートな敷地で完結せず、周囲を巻き込める空間づくりを心掛けている。私のクライアントは普段庭いじりしないが、緑に興味がある人は多い。まちなかの風景づくりのために植物を植えましょう。と提案してもさほど抵抗はなく、周辺環境への理解のある人がランドスケープの真の顧客なのではないかと思う。ランドスケープの認知度向上は、あと一步を踏み出せないクライアントへの“ナッジ”が必要なのである。実際に私のクライアントは最初、極力緑



はちおうじ緑化フェア 三崎町公園

は植えたくないというが、竣工後はなぜか自ら植物を増やそうとしてくれる。

個店、ストリート、公園一帯のランドスケープ

東京都が行う界隈緑化事業と2017年の全国都市緑化はちおうじフェアを利用し、まちなかの商店10店舗と500m以上もある歩行者が優先の道、その道に隣接するポケットパーク2か所を緑化する機会を得た。店舗で植える場所といっても10cm～0cmのセットバック部程度のスペースであったが、地先の緑化は緑のネットワークづくりに欠かせないため、行うことにした。緑の効用ワークショップ、ディスプレイ講座などを10店舗の店主と1年以上の歳月を得て緑化プランを作り施工した。緑化しすぎると、店舗がお花屋さんになってしまうため、店を活かすための添え物の緑を心掛け、店主が気に入った植栽と維持管理のしやすいものに限定した。特に店と店の境界には、つなぎの緑を配置し連続性があるようにした。植物は和モノ洋モノで緑としての連続性を保てた。また夜の風景づくりのため共通の植栽個店毎に違うが、照明設備も導入。個店の連続を分断していた10㎡にも満たない空き地オーナーからも協力したいという声上がり、夜はおでん屋台が入るモバイルスペースを確保。日中は道行く人が少しでも滞留できる居場所となっている。緑化フェアを機に道路利用を促進させ、行政と共にベンチとプランターを設置。花はボランティアが種ダンゴで演出し、地域も巻き込みながら景観をつくった。また、2つのポケットパークの1つは、花街にも隣接しているため、花街の特徴を公園に反映し、歩くほどに移り行く景色を演出できた。造作物や植栽、ベンチはすべて町会が再利用し、現在も事あるごとに利用され、日常で座れるベンチプランターも緑化フェアのレガシーとして現在も増加中である。

ランドスケープは希望

これからのランドスケープの仕事は、“みどりに興味がない人”や“少し興味があるが一步ふみだせない人”と出会い、緑の効用や活用法を伝えることだろう。ランドスケープ先進国の日本、アメリカ、ヨーロッパにおいてもまだまだ一般市民に伝えきれてないことが多い。今後は成長するアジア、南米、中東、アフリカ地域でも特にその必要性が増している。気候変動は世界中の問題であるし、急成長する新興国の都市はヒートアイランドも深刻であり、屋外活動が減少すれば人間らし

い生活ができず、ヘルスケアの問題も顕著になってくる。特に暑さの問題は公衆衛生や経済活動の減退の他、犯罪率増加にも結びつくかもしれない。2018年のIFLAシンガポール世界大会のコンペでは災害に対するレジリエントだけでなく、テロリズムというカテゴリーも飛び出した。平和な日本では身近ではないが、テロや戦争後の復興にもランドスケープのスキルが必要なのだ。自然災害からの復興、洪水対策、砂漠化問題なども我々の活躍が期待される。減災の手法、暑熱対策、緑化技術の他、日常の居心地のよい空間を提供できる日本のランドスケープアーキテクトたちは、世界の希望かもしれない。

略歴：1981年鹿児島生まれ。工学院大学建築学科卒業後、コペンハーゲン大学とスウェーデン農業科学大学で修士修了。スウェーデン農業科学大学 (MLP) 豪州にてランドスケープ事務所勤務後、現在(株)ロスフィー取締役、RLA、工学院大学建

築学部非常勤講師、NPO法人ポケットパーク理事長、多世代交流拠点 kikki+ の運営。JLAUIFLA 委員気候変動タスクフォース担当。

共著：世界で建築を仕事にする2 ランドスケープ編

